

手這坂活用研究会

キーワード：桃源郷 集落景観再生

活動地域：秋田県山本郡八峰町

活動地域概要：

2006年に八森町と峰浜村が合併して誕生した町。県の北西部に位置し、東は「白神山地」の登録地を有する藤里町、南は能代市、西は日本海、北は青森県に接している。面積の80%近くが森林で占められている。年間の平均気温は10 前後。冬は、低温で日本海側特有の北西の強い季節風が吹き、積雪は平野部で10～50cm、山間部では100cm以上になる。人口1万人弱の自然豊かな地域。



団体・活動概要：

江戸時代の紀行家菅江真澄が「桃源郷」と絶賛したかやぶき民家4軒だけの集落は、2000年から無人となっていました。地域内外の有志が中心となり、民家と集落を再生して都市と農村の交流拠点とすることを目的として、団体が結成されました。これまでにを行った民家の修理により2軒は宿泊が可能となりました。また、周辺の遊休農地についても民家と一体となった景観の再生をめざして、雑草駆除等の整備を行い、米づくり、そばづくり等に利用してきました。また、住民とのコミュニケーションを深めるためのイベント「桃源郷まつり」を行っています。



助成対象活動では、民家の老朽箇所の修繕、道標・看板の設置を含めた集落の景観の再生、再生民家の一般公開を兼ねた四季を生かしたイベントを実施して、地域の活性化に努めました。今後は、民家の本格的な屋根の葺き替え、遊休農地の「市民農園」的活用の検討の他、農家民宿による資金確保システムの確立を目指します。

手這坂活用研究会

設立：2001年 メンバー総数：150名

代表者：大高孝雄

連絡担当者：嶋津宣美

連絡先：〒018-2509 秋田県山本郡八峰町峰浜沼田字家の下156-2

TEL：090-5599-4579

FAX：0185-76-2113

E-mail：shimatsu.nobuyoshi@town.happou.akita.jp

ホームページ：なし

1 団体の目的と経緯

(1) 目的

白神山地の無人のかやぶき集落「手這坂」を再生させて、江戸時代の菅江真澄の「桃源郷」を再現する

(2) 経緯

無人集落を都市生活者と地域住民の交流拠点に手這坂(てはいざか)は、秋田県の最北部、日本海に面する八峰町にあり、世界遺産「白神山地」の南山麓に位置し、国道から6kmほど白神山地に入った里山である。

江戸時代の文化4年(1807年)に、北東北を中心に多くの紀行文を残した紀行家菅江真澄が訪れ、桃の花の満開の風景に魅了され、「桃源郷」と絶賛した集落であったが、交通の不便さや屋根の維持の困難などを理由に2000年に無人集落となった。地主さんや地元の有志が中心となってボランティアを募り、民家だけでなく農地なども含めてそっくり昔のままの姿で残して、若者の定住やグリーンツーリズムなどに生かしたり、合わせて都市生活者と地域住民の交流拠点にしようと活動している。

菅江真澄の紀行文『おがらのたき』の中で、『ここに誰世々咲く桃にかくろひておくゆかしげに栖めるひと村』と手這坂で詠み、桃の咲き誇る絵と村人の生活の様子を記録している。私共の活動はこの記録があって継続しているようなもので、もし記録や絵がなかったら多分民家の再生はしていなかったであろう。真澄の記録から丁度今年が200年目となるが、そうした節目のこの時に、手這坂を廃墟にしたとなれば、今この時に生きている我々にとって、先祖と後生の者達に笑われるだけである。そうしないためにも出来ることをしなくてはという思いで活動を続けている。



手這坂地域

手這坂から車で15分ほど奥地に「世界遺産白神山地」に至る「水沢山ブナの森公園」があり、年々ここを訪れる都会の方が増えている。それと手這坂の向かい山「町有林石黒沢」では、山にブナを植える活動が10年も続いている団体があり、これにも都会から多くの参加者が来ている。

また、手這坂の脇を流れる清流水沢川はイワナなどの溪流釣りに首都圏から毎年たくさんの常連さんが来る、知る人ぞ知る溪流釣りのメッカとなっている。



みのる宅の外壁交換作業完成風景

1995年頃から冬場の道路の確保、或いは屋根の維持などを理由に、里に移る世帯が出始め、2000年の春には最後の世帯が里に引っ越しして無人集落となった。今もかやぶき民家が真澄の絵と同じ4軒が残るものの、文化財になるような建物でもないことから屋根には穴が開き、家の中が雨漏りで廃墟のようになっていた。周りの農地も草丈が人の背丈を超えるほどで、農地の面影がなくなっていたが、民家の調査に入った大学教授が学生と共に廃屋寸前の民家の内部の片づけを行ったことが地元を動かし、大工やかやぶき職人、地主など町内外の有志11名でボ



冬の手這坂の風景

ランティア団体「手這坂活用研究会」を、2001年の夏に結成した。活動を続けてきたことから、現在は140名にまで会員が増えている。

当初は、民家をグリーン・ツーリズムに役立てる施策を行政にも提言したが、個人の財産に行政が支援できないと受け入れてもらえず、関係地主の了解を得て、有志による民間ボランティアで行ってきた。

かやぶき民家を残して、前述の白神山地やブナの植林、或いは遊休農地などを活用して地域の活性化に役立てようということがねらいであった。真澄が見た桃の花の咲き誇る「桃源郷」を再現し、周辺にある自然や農地などを生かしてグリーン・ツーリズムを実践し、ひいては地域住民と都会の方々との交流拠点として活用することにより、若者が活躍できる場として活用することが目的である。

2 活動の内容

2001年の春から民家の周りの草刈や、雨漏りで腐った畳などの搬出を大学生が中心となって始め、この年の8月に会員を募り、活動資金を確保して民家再生のボランティア活動が始まって6年目となる。

(1) かやぶき民家の再生活動

・ 200年前の記録に残る集落の民家とその周りの環境を再生することを第一に、毎年老朽化の進む民家の屋根の葺き替えや建物の修繕、或いは昔風な民家への模様替えを進めてきた。今回の支援では4軒のうち2軒の民家(たいいち宅・みのる宅)の屋根の修理と、外壁のトタン張りを杉板を焼いたものに張り替えることができた。これによって以前に比べて民家が生き生きと見えるようになった。(たいいち宅作業6月16日～30日、みのる宅作業8月1日～10日)

(2) 集落の景観の再生



たいいち宅の屋根の修理作業

・ 周辺の遊休農地のうち約1haほど(南地区)は今年度の活動によって機械を準備して雑草を駆除して再生を終え、再度農地として活用できるように、景観作物の菜の花を秋に蒔いた(8月上旬～9月18日)。この春の開花が待たれるところである。

・ 6年前に仮の修理をした建物内部でも予想以上の老朽化が進み、敷き板を二度に渡って修理した。これには大工さんを講師に、ボランティアを動員した。再度中古の畳を確保して利用できるようにした(10月30日・11月27日)。

・ 遊休農地の再生では、農村の原風景を演出するのに役だっており、田んぼでは休日だけの米作り体験「手這坂日曜農学校」が開設され、約20aで非農家による米づくり体験が実践された。



遊休農地の再生活動

・ これまで手這坂は無入であることや、行政が関係しない団体活動であることなどから表示が一切なく、訪れる方々からも苦情が多く寄せられていたが、これを解消するために国道と県道にそれぞれ1カ所づつ桃源郷手這坂の「道標」を設置した。(5月連休)



みのる宅の外壁交換作業

合わせて集落の入口には「菅江真澄歴史の里・手這坂」の看板を設置し、イベントの時に使用する「のぼり」も四季の分を作製して訪問者の利便に役立てることができた。

- ・冬の積雪が多く、雪の重みで倉庫が1棟倒壊した。飛散したトタンなど、景観の保持のため春一番の作業としてボランティア活動によりこの倉庫の解体・処理を行った(5月1日・29日)。

(3) 民家活用イベント

- ・この1年間の活動では春の桃の季節に合わせて民家の一般公開「春の桃源郷まつり」(5月8日)を初めて開催し、新緑の集落で郷土芸能や野点などを開催した。2002年から始めた秋の再生民家の一般公開を兼ねてのボランティアへの感謝を目的として大衆演芸を民家で楽しむ「秋の桃源郷まつり」の方も開催することができた(11月6日)。
- 活動の中で春の桃の花、夏のホタル(6月中旬～7月下旬)秋の民家での大衆演芸、雪を使った冬まつり(3月5日)など、季節を代表する手這坂の小さな宝を発見できた。近くの沢では大きな無名の滝を発見したり、民家の前の水路では産卵のイワナを見ることができた。こうした手這坂だけの宝を使ってのミニイベントが季節毎に開催され、会員だけでなく地域住民や町外の方々にも知られるようになり、年中週末の手這坂には人が絶えることがない。こうしたイベントや再生活動には最初関心の薄かった地域住民も参加するようになり、



大雪の民家

今では開催が待たれるようになっている。また、再生になった民家の一部は会員の活動や地元の自然保護団体の活動の中で、或いは各種団体の会合や交流会などに利用されるようになってきた。

(4) その他の活動等

- ・継続的な活動に遊び要素を取り入れるため、手這坂固有の地域通貨『桃源』を発行し、ボランティア活動に参加して民家に泊まったり、食事をごちそうになれるしくみに加え、町の入浴施設や産直施設での利用も拡大させることができた。
- ・特に今年度はこれまで活動をリードしてきた明治大学の山崎教授が亡くなり(4月22日)、ボランティア活動の主力であった大学生の参加が危ぶまれたが、幸いにして地元の国際教養大学が学生の社会体験事業として「インターンシップ」(8月1日～10日)に手這坂再生活動を加えてくれたことから、7名の学生が長期間民家に寝泊まりしながら再生活動に参加してくれた。
- ・活動内容を会報「手這坂桃源郷情報」で周知し、会員が手這坂に来なくてもボランティアの募集や活動の状況把握ができるようにした。(月1回発行)
- ・ブナの植林(6月12日)とブナ植栽地の下刈り作業(10月23日)に会員が協力し、民家を休憩会場



春の桃源郷祭りでの創作太鼓演奏風景



民家での猿倉人形芝居

として活用した。

- ・青森県、岩手県、秋田県の北東北3県のかやぶき民家再生団体の交流会「北東北かやぶきサミット」が、青森県新郷村で開催され、研究会も参加した。(2月25日)
- ・間もなく消え行く希少風景を集めたガイドブック「残したいね日本の風景」にも掲載される。(4月14日)

3 活動の成果

継続した活動と季節ごとのイベントが住民の関心を喚起

- ・手這坂はもともと菅江真澄の「桃源郷」の記録がある所としてある程度知名度はあったが、活動のニュースや四季のイベントの様子が時々テレビなどでも取り上げられることから更に知名度が上がり、大型バスが乗り入れたり、無人集落に行列ができるようになった。観光を目指しての活動ではなかったが、様々な活動の結果は一般の方々からは「観光」という面で受け取られたようである。3月27日に隣の町と合併して「八峰町」となったが、地元の新聞は手這坂が町を代表する観光地的な扱いをすると共に、白神山地と手這坂集落を組み合わせた利用に期待が寄せられていたことから、世間の評価は手這坂は観光地ということのようである。こんな見方について会としては残念であるが、目指すは観光地でも観光でもない、田舎の風景を守り里山体験のできる場所にあることから、会の目論見とは若干の違いがここで生じてしまった。しかし、町の知名度が高くなることは決してマイナスだけでなく、むしろそれをうまく利用するこ

とが大事である。こうした活動に地元の方々も参加するようになってきたことは、地元にもそれなりに変化が出てきたものと嬉しく思っている。

- ・最近、地元の道の駅にある産直施設で、「桃源郷だんご」なるものが売られてヒットしている。手這坂の行き返りに立ち寄っては野菜などを求める観光客が年々増え、年間売上高は1億円を突破した。町の玄関口として手這坂の道案内なども多くあるというが、私共の活動が少なからず地域の活性化に刺激となったり影響を与えているようだ。
- ・再生民家の一般公開を兼ねた秋の桃源郷まつりでは、一般の参加者も含めて多くの方々がかやぶき民家での猿倉人形芝居やハーモニカ演奏、或いは民家を使つてのそば打ち体験などを楽しみ、更けゆく里山の秋を堪能した。更に、春としては初めて実施した桃の花見をメインとした春の桃源郷まつりでは地元の太鼓演奏や野点で地元の方々も新緑の里山に触れることができ、大変好評であった。
- ・農地の再生では水路の復旧や耕作放棄地の復元を行い、約1haほど菜の花を蒔いた。この成果はこの春でないと確認できないが、地元の養蜂家とも協力して蜂蜜の採取に活用する予定である。これまでの活動によりホテルが更に増え、桃の木の植樹によって桃が咲くようになり、真澄の時代のような風景に一步戻すことができた。
- ・宿泊施設の少ない町だけに、ブナの植林ボランティアや白神山地での散策の休憩や宿として、或いは子ども達の里山体験の場としても活用される機会が増え、都市部の皆さんからは好評である。
- ・これといった観光資源のない町にとって、無人集



古民家の床の修理の様子 1



古民家の床の修理の様子 2

落手這坂の再生は活動途中にあるものの、菅江真澄の「桃源郷」の里のイメージアップに大いに役立っているところである。

- ・再生活動のボランティアとして地元の国際教養大学がインターンシップ事業で参加することとなったことは大きな成果であった。
- ・昔の風景に戻すための活動が認められ、外国映画「SILK」のロケ地の候補となったが、最終的には外れた（10月3日）
しかし、有名な監督（フランソワ・ジラルド監督）だけに今後の活動にとって大きな励みとなった。
- ・これまでの活動が評価され、農水省の「むらの伝統文化顕彰」を受けたり（2月22日）、総務省のボランティア誌「ヤッテボラン」に掲載された（10月）。
- ・ガイドブック「残したいね日本の風景」に掲載され、NHKの番組で活動が全国に紹介された（4月14日）。
- ・菅江真澄研究会（秋田市）との関わりが一層強くなり、民家での移動研修などが度々開催されるようになった（6月12日）
以上の観点からしても当初予定していた助成金によって目指した目標は、我々が予想した以上に効果を生み、地域を元気にすることができたと実感している。

4 活動資金

- ・年間活動費総額：2005年度の年間費約180万円。
うち助成金以外の主な財源は会員などから50万円、県商工会議所連合会のまちづくりコンクール

の賞金30万円、外国人の方々の団体（県内のAssistant Language Teacherの集まり）から20万円の寄付をいただいて事業を展開した。助成金以外の割合では全体の55%を占めている。

- ・助成期間終了後の活動資金の確保の見通しであるが、会員からの会費を値上げしたり、企業などの社会貢献支援などに要望して、ここ数年で自立に向けた活動の定着と強化を図りたいと考えている。具体的な方策としては、遊休農地の再生後の活用として「市民農園」的な活用を模索して、参加者から利用料をいただいたり、民家の利用によって活動費を捻出したり、再生農地を使ってブナの苗づくりによって資金とするなど、恒久的な民家再生資金の確保に向けた活動に入りたいと思っている。

5 課題

民家の維持 地元協力者の確保 財政基盤の確立
民家活用人材の確保・養成

- ・研究会の目下の課題は民家の維持にある。それぞれの民家が空き家となってからの期間が長く、どの民家も屋根を中心に修繕の必要に迫られている。特にこの2年間は冬の大雪に見舞われ、雪解けと共に屋根の修理箇所も増えている。
再生をしたものの民家に人が住まないことから老朽化も激しく、建物内部の敷き板まで腐蝕している。このため、更に民家の屋根の修理費の捻出が必要となっている。
- ・民家再生など手這坂の活動ではどうしても労力の確保が課題である。幸いにして地元大学の学生ボランティアを確保して活動を展開しているが、農地再生や環境整備など、会の活動も年々間口が広



国際教養大学の学生との交流会



「むらの伝統文化顕彰」受賞の報告

がってきており、ますますボランティアの確保、特に地元の協力者の確保が必要になってきている。

- ・4軒の民家の維持であるが、資金と活動を会が、民家や農地は農家個々の資産であることから会の活動に無償で提供してもらっている。しかし、電気や水道・固定資産税等の負担については地主さんの好意に甘んじている状況にあり、会の財政基盤の確立・自立が急務である。
- ・活動が6年目となるが、依然として屋根の再生という、先の見えない活動に会員からも心配の声が出ている。こうした課題を抱えての活動ではあるが、更に活動を続けて、民家と農地を利用できる状態にして、それらを使って自立に向けた農業体験や生活体験などのできる、里山手這坂ならではの交流材料をそろえ、民家を民宿として活用して、そこから捻出されたお金でその後の再生資金とするというサイクルを考えている。そのためには民家を利用する人材を見つけること、里山をじっくり楽しんでもらえるソフト面をカバーする人材の確保などが大きな課題である。

6 今後の展望

本格的な屋根の修理 市民農園 民家周辺の整備
収益を得るシステム確立

- ・現在進めている屋根の再生活動は老朽化している部分に「刺し茅」という方法で屋根の延命を図っているだけであり、本格的な屋根の葺き替えまでには至っていない。建物も最低限利用できるようにするためのもので、元々の建具の取り付けなどの作業も残っている。今後の活動では雨漏り箇所の解消だけでなく、使える民家への転換を進めるため、追々は本格的な屋根の修理を行うことを考

えている。

- ・周辺の遊休農地などについても再生後に実際農業体験などに使えるように、様々な作物や果樹類を栽培して、農村生活の体験で農産加工体験などに挑戦したいと考えている。そのため、再生農地を試験的に「市民農園」的な利用を進め、地主に所得が入り、民家の管理者にも所得が残るようなくみを模索したいと思っている。将来は農地の所有まで行い、畑や田んぼを農業体験の場にしたり、農産加工体験の材料を作るなど、民家を利用しながらの市民農園といった使い方を模索したいと思っている。
- ・昔の里山の生活体験を行うためにも、近い将来に炭焼き窯や、しいたけのホダ木栽培などもできるように整備したい。
- ・再生後の利用では、民家の再生資金を確保するため、民家全体を貸し出しできる宿、或いは農家民宿として活用することで安定した収益をあげ、それを民家再生に向けることで恒久的な資金の確保システムを確立したいと思っている。また、世界遺産白神山地のブナの散策ガイドや、ブナの植林活動への苗の供給事業などにより、若者がこの民家を使って民宿をしながら生活できる場にしたいものである。



北東北三県茅葺きサミットの様子



冬まつりの様子